

地域の人の写真展で発信・表現する情報活用の実践力

三好市立下名小学校 教頭 中川斉史

キーワード：デジタルカメラ、PC、タブレット、メディアリテラシー、総合学習、キャリア教育、地域連携

1. はじめに

学校現場にデジタルカメラが普及し始めてから 20 年以上が経過した。その間デジタルカメラ以外にも、スマホやゲーム機、タブレット等の普及で、写真撮影を誰でも気軽に行っている。撮影後は、すぐ共有して確認するといった一連の流れが常識となってきたが、印刷して楽しむ写真という活動にも焦点を当てたいと思ったのがきっかけである。

子供達にとって、身近にあるメディアから得られる情報は、編集者によって意図を持って表現されている情報であり、事実とは異なることもあるということを理解するのは容易ではない。しかし、ネットを活用した活動が増えてきている時代だからこそ、メディアリテラシーがますます重要になってくると考える。

そこで、子供達が写真展を開催したり、パンフレットづくりをしたりすることを通して、自らが編集者となり、集めた情報を加工し、意図的に表現するといった体験をさせる。そして、この活動そのものが、メディアリテラシーに関する学習となるようにし、地域と連携しながら、完成度の高い作品作りにつながるような実践を行ったので、報告する。

2. 実践の内容

本校は全校児童数 17 名の、山間地にある極小規模校である。そのため地域のお年寄りや、観光施設の方とふれあう機会が多く、学校行事等で数々の協力をいただいている。本実践では、学校の行事などでいつも子供たちとふれあっている地域の方の笑顔の写真を撮ることから始まる。

2. 1 活動の基本的流れ

今回の実践では、アウトプットとして、学校近くの道の駅のギャラリーに、子供達の撮影した写真を展示するといった活動が中心となる。ただ、それに至までのプロセスや、その後の活動の展開などに特色がある。



年間 3 回行う写真展

(1) 写真誌（機内誌）の分析

写真には、キャプションを付けることで、その印象がずいぶん変わる。子供達は普段はそのことをあまり意識していないので、まずはキャプションについて意識するところから活動はスタートした。

写真のキャプションは、単なる写真の説明だけでな

く、取材したことをキャプションに入れるところが難しい。そこで、まず写真雑誌の分析をし、よいキャプションがどのようなものなのかを学習した。

人物や品物についてのキャプションが優れており、学習するのにぴったりの教材として、ここでは、機内誌を利用した。そして、自分たちのキャプションをつけられるようにしていくことを共通のめあてとして意識させた。



機内誌の分析

(2) 取材

校区には数多くの取材対象者がいるが、いきなりの取材と写真撮影では時間を有効に活用できないため、まずは校内の先生方の取材を行い、すぐに相互評価ができるようにした。

(3) 作品作成とキャプション記入

そしてすぐに写真作品の製作とキャプション作成に取りかかった。写真は、横に撮影した写真をトリミングにより縦に表現するようにし、切り取り方で印象がずいぶん違うことを経験させた。



トリミングとキャプション記入

それと同時に、取材したことをキャプションに取り入れる作業を行った。

(4) 繰り返しによる質の高まり

ここまでの作業を一セットのルーチンとして行い、写真展を行うための事前準備とする。そしていよいよ次のように対象を変えて同じプロセスを 3 回繰り返す。

取材の対象は、

- ① 地域や観光施設（レストラン、駅、駐在所、商店、タクシー）
- ② ホテル（働いている人全て）
- ③ 老人会（年に数回学校に来て、様々な活動をしてくれるので、その機会を利用）

の 3 つであり、いずれも学校の活動で子供達と面識のある方がほとんどである。

このように、対象を変えた活動を繰り返すことで、子供たちの形成的評価が行われ、クオリティが高くなることを期待した。実際、子供達の写真展の作品は、回を重ねる度に、確実に質が高くなっていった。

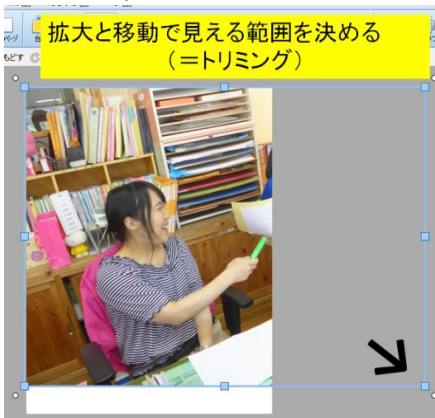
2.2 活動中に見られた特筆すべき点

(1) 取材時の分担

全員がカメラを持つと、撮影に夢中となり、肝心の取材メモがおろそかになる。子供達がこのことを実際に経験し、反省をもとに次の取材に生かす。すると、取材の際チームを編成し、撮影者と質問者、そしてメモ係を分担するのがよいということに気付き、自主的な役割分担が行われるようになった。一度は失敗させるというプロセスがカリキュラムに仕込まれているため、指導者側も余裕を持って活動できた例である。

(2) 小学生にとってのトリミング

トリミング作業は、子供達にとってイメージしにくいのが普通である。切り取る枠の縦横比が、印刷用紙の関係で決まっているため、画面上で相似形に切り取るのは難しい。そこで、今回利用したのはジャストスマイルの中の「発表」（旧はっぴょう名人）である。これにより、印刷される部分の白枠に合うように、写真を拡大したり移動させたりすることで、結果的にトリミングしたことになるようにした。この方法は、子供達にとってとても分かりやすい方法で、3年生でもすぐに理解して作業に取りかかることができた。



拡大と移動によるトリミング作業

(3) 一度の取材ネタを有効に使う計画の有用性

写真展だけに絞った活動では、一つの取材で一つの



機内誌風グラビアに仕上げる

作品を作るというスタイルになり、時間的にも無駄が生じてしまう。しかし、写真展のために取材していると、人物だけでなく、風景や特産物の写真なども撮影することになる。またたくさんのショットを撮りためているため、いろいろな切り口でそれらの素材を並べ直すことができる。

そこで、年間を通しての取材活動で得た情報を、表現方法を変えて表すようにした。つまり、活動のはじめに分析した写真雑誌を参考にし、作品作り（機内誌風グラビア）に戻るといふしかけである。ここでは、レイアウトや余白、写真の大きさなどの工夫だけでなく、表紙にもこだわらせ、印刷物として作品を残すようにした。そのため、子供達はもちろん、取材に協力いただいた方への御礼としても活用できた。

さらに、それらを学習発表会で保護者や地域の方に披露するといった活動においても、作成したパンフレットをそのままプレゼン資料に使うことで、準備などにかかる時間を短縮できた。

3. PCとタブレットの使い分け

本実践においてPCとタブレットは、その用途によって使い分けている。右の写真のように、PCは作品作りにおいて、文書作成や写真の配置、細かいレイアウトの微調整など、印刷物のクオリティを高めるために重要なツールである。ここでは、「大画面ディスプレイ、フルキーボード、マウス」といった機器が、良い作品を仕上げるために活躍する。

またタブレットは、製作した作品をプレゼンするために使う。発表では、指によるピンチインを効果的に使いながら画面を説明する。そのため、原稿を読むのではなく自分が本当に伝えたいことを、写真にこめて発表することができた。

つまり、用途に応じて、それぞれの機器の特性を生かしながらICT機器を使うということを経験的に学ぶことができたと言える。

デジカメ撮影は、どの学校でも日常的な活動であると思われるが、一枚の写真にこだわり、さらに取材をメインとしたキャプション作りは、写真を撮りっぱなしにせず、しっかりと取材することにつながったと思う。

4. おわりに

学校外で写真展を開くということで、その写真の出来映えだけでなく、取材した内容が間違いないかなど、何度も何度も友達どうして確認し、良い作品に仕上げようとしていた。また、訪れた観光客に対し自ら進んで写真展会場に呼び込んだり、自分の作品を堂々と説明したりする姿が見られた。そのほか、展示場に置かれた感想のノートには、全国各地から訪れた観光客からの温かい励ましメッセージが残され、自分たちの住む地域の良さを再発見し、ふるさとを大事にしようとする意識が高まったと言える。また、海外からのお客さんが書いた文章では、香港やフィリピンの方が英語で書いており、世界の共通語としての英語への関心が高まった。

いずれにしても、写真一枚で子供達の活動が大きく広がっていくことを改めて痛感した。この活動は、どの学校でも再現できる活動であり、一年間をかけてじっくり取り組むことで、子供達が確実に変わっていく活動の一つと言える。